ある声楽家のため息

―音大生の現状からその幼児期を考える―

小野邦代

◆音に無関心な音大生

音楽大学にはいってくる人たちが、私のように音に興味をもっている人ばかりじゃないということに、やっとこのごろ気がついてきました。バカのあと知恵というんでしょうか。最初は、自分と同じにものすごく音が好きで、歌がうまくなりたいんでこの学校にきたんだ、と信じていたわけです。

ある日一人の学生から〝適当にやっていただくだけでけっこうです〟といわれたんです。もう、がく然どころじゃなくて、大地震にあったような気がしました。私は、もちろん自分だって完璧な演奏なんてやったこともないし、できもしないけど、とにかく音が好きで、美しさ、楽しさ、というものを自分で勉強していきたい、という気持があります。この人のもっている五なら五の能力の範囲で、絶対に五までもっていきたいと、こっちは思っているわけなんです。でも本人にとっては、それが迷惑なんですよね。こっちがいいと考えていることを、必ず向こうもいいと考えてはくれない。こういうことをやっと勉強したんです。

曲をあげることには興味があって、何曲あがったら先生になれるのかなどと、どうしようもない人が本当に多いです。何曲やった、なんていうのは、その人の音楽的なものとは関係がないんです。どのくらいその曲を深く考え、どのくらいきれいな音を出し、どのくらい深く感じたかということの方が問題だと

思うし、なにも何十曲やり、十何年ピアノをひいたって、全然音楽になっていない人だっているわけです。

先生から与えられたもの、親からこうしなさいと言われたものしかしようとしないんですね。だから発展がないんです。これは恐しいことだと思います。

レッスンをしていて、まえに同じ曲でほかの人が注意された、その同じところを注意されるんですね。人のことに非常に無関心なんです。音楽を勉強するいじょう、どんな音にだって関心をもたなくちゃいけないのに、それをもっていないんです。そのうえ、となりでとんでもない変な音を出していても平気で歌っている、というのも無神経すぎます。

音楽をやりたいからではなくて、音楽大学を卒業したいからだけのような人、親孝行のために学校に入ったのがいます。こういう人には、少なくとも音楽をやってもらいたくないと思います。なんのためにこんなに音楽人口がふえているか、非常に疑問ですけれど、そのうちにおそらくこういうのはすたっていくと思います。私なんかも、毎日毎日どうにもならない音楽家をつくっているわけですが、月給どろぼうじゃないかと思うこともあります。けれども需要があるいじょうは、わりきって、この部分はそうじゃない、ほかの部分はお金のため、というように向こうが要求しているだけのことをこっちもやればいいと考えるようになりましたけど……。

◆音楽バカ

ことしも入試で、歌もピアノも一番の人が、語学が非常に悪くてだめでした。平均して何もかもよくできるというのは、ある程度音楽家には不向きなんです。やっぱり集中して何かをやる、というのが伸びると思うんですが、世間がそういうものを認めなくなってきているし……。だから私も近ごろは、学科の成績をさきに見るんです。既成品を作るようでいやなんですけど、学校がうけ入れてくれないいじょう、しかたないですよ。だんだんと〝音楽バカ〟のようなのがなくなってきました。私も、たくさん、何億、というようなお金があったら、ぜったいに〝音楽大学〟じゃなくて〝音楽専門学校〟を作りたいなんて、思いますけれどね。何もかもよくできるというのは、人間にとって不可能だと思いますしね。〝いやいやじゃない音楽〟ばかり聞かせられる学校ができないかしら、なんて考えてます。

◆幼児教育科はやさしい

私らもよくないんです。本人と親の希望で、とにかく音楽大学へ入れたいというので結局入れてしまうのがよくないんです。幼児教育科に入学した人の中で、本当に幼児教育に興味をもっ

てきたというのは、もう十人もいないと思います。あとはただ自分が音楽的に劣っているから、幼児教育科なら通る、教育科には通らないというカスをひきうけるわけなんです。

幼児教育科の人たちは、私は声が悪いから勉強をしてもだめだというふうに、最初から決めてしまっているんだけれども、いい声でも雑音があるわけです。全然音楽にならない音、動かない音、音楽というのは、常に流れていなきゃだめですし、動かないと結局雑音になってくると私は思うんです。いい声にもかかわらず音楽になっていない音、それから、変な声にもかかわらずいい音楽になっている音というのがあるわけです。

たとえば、ルイ・アームストロングだって、マヘリア・ジャクソンだってそうです。楽しい音楽ですからね、あれは。そういう歌の心というもの、人の心におちこむ、子どもの心をとらえるというように、何か音楽になっていればいいと思うんです。

音楽はまず、楽しいものだということを子どもにうえつけるためには、そんなに上手に歌う必要もないし、いっしょに何かしてくれる、という意識が、子どもには一番大事なんじゃないかなと思います。

教育科の卒業生が手紙をよこしまして、

――自分が歌わなかったということが、どのくらい子どもに対して影響力がないかということが身にしみてわかりました。私はある程度ピアノは得意でしたが、ピアノの名演奏をしても、子どもはピアノの回りでグルグル回っているだけなのです――

というんです。グルグル回って、どうしてあんなに指が速く動くんだろうぐらいの興味しか示さないと。だけど、そこでちょっと変な声ででも歌ってやると狂喜して喜ぶ、というんです。

要するにそれは心の問題だと思うんです。その先生が、子どもといっしょに音に興味をもって何かしてやれば、もうすでにそれがにじみ出てくると思うし、子どもはすごく敏感ですからそれを感じると思います。

◆「過保護」という残酷物語

親の過保護という問題も大きいと思いますね。その子の素質自体は、もっとすばらしいものだったと思うんです。親がまわりで余計なことをベチャクチャ言うから、頭の方が働かなくなったわけです。そうすると、「この子は何もできないから、私がいなければどうにもならない」と思ったりして、悪循環であいうふうになっちゃったと思います。

おかあさんが自分の子どもに向かって、「音楽が好きなんです、ほんと、ネッ、ネッ」と言われるのを聞いていると、かわいそ

うで涙がこぼれそうになります。あれで子ども自身が〝やりたい〟と思ったことが何%あっただろうか。親が「あなた、したいわよね」とおしつけて、子どもが「そうだ」とだんだん思うようになったのではないか……と思うんです。

手のかかりすぎた子は、絶対に伸びません。素質もすばらしいし、お金もふんだんにあり、時間もあり、家まで建ててもらっても、過保護というのは伸びないんです。私が、本人に音楽的な質問をしても、全部親が返事をなさるんです。そして、「うちの子は無口でして」とおっしゃる。無口じゃなくて、おかあさんが子どもが言うまえに全部おっしゃるから、子どもはボワッーとしているんですね。あれはもう、残酷物語です。

それから、失望ばかりしているんじゃなくて、いつもニコニコしているような人、これはやっぱり伸びます。根性もついでに育っていますしね。親が、「自分はこれだけできたんだから、あなたも同じようにできなきゃだめよ」みたいなことをうっかり言っていただくと困ります。とにかく、失望がはね返らないような育て方、これは何も音楽教育だけの問題ではないと思います。たとえば「おばあちゃんがおみやげ持って来るわよ」なんて言っていて、何も持って来なかったりとか……。そんな小さなバカげたことから子どもというのはどうにでもなります。いつもニコニコしているようになるには、おかあさんがまずニコニコしていていただきたいです。

◆常にespressivoのある音を!!

生まれたばかりの赤ちゃんに対しても、何か実験した人もいたようですが、そういうころに何か、すでに音楽を流すとかいうのがいいんじゃないか、と思うんですけど……。日野晧正というトランペットをやる人がいますが、どうしてあんなにリズム感があるのかと思っていましたら、お兄さんがタップダンスを無理やりに習わされたんだそうです。(でもすぐに興味をもったそうですが)それで弟も負けじとやって自然に二人ともリズミカルになったんだそうです。

きびしくというのはよくないですけれど、子どもの興味を失わせないで、音楽をくりかえし聞かせるという方法が考えられないでしょうか。母親が、ちょっと離れてさりげなく音楽を流す、というようなことをしてくださったら、もっと何か心で歌う、espressivoとかが育っていくんじゃないでしょうか。医学的にも音に敏感な年齢があるんじゃないかと思います。その時代に、「ワーッ」と音楽を聞かせる、というか、朝から晩まで遊びの中でモーツァルトでも何でも、とにかく音楽を聞かせる、ということですね。

二歳半から三歳ぐらいの子どもが、テレビの音楽などを聞いて調子よくからだでリズムをとっていますね。親よりもずっとリズム感がいいんです。こうしなさいとおしつけるんじゃない形で興味をつなぎながらやることが大切です。テレビを見てからだを動かすというのは、テレビの中の人がからだを動かしているから、自分もそのまねをしてみる、というわけで、テレビは絵と音がいっしょにくるので、これはやはり強いと思います。

これだけ色々なものが豊富にそろっているのです。私たちの時代にはテレビはなかったし、ラジオもＮＨＫだけでしたから、良いものを聞くという機会にめぐまれていなかったわけです。それにレコードだって少なかった。それがこれだけレコードもあり、何もかもあるわけですから、親のちょっとした心がけで、いい音楽をどうでも子どもに聞かせられると思うんです。

◆共に楽しむ姿勢を

公園なんかで見ていると、子どもは本当に音に敏感です。とにかくどんな音だって音楽にしようと思えばできるわけです。車が通る音だってそうです。おとなは全然気づかなくて、ただ雑音として聞いているのに、子どもたちはちょっとおもしろい鳴り方などすると必ず気がつきます。子どもの生活を、常にからだを働かせているようにもっていくことです。子どもはいやな音には顔をしかめます。打楽器だって、母親がただたたいてしまったらそれきりだと思います。espressivo のはいったいい音を出すように考えれば、子どももだんだんと、軽くたたいてみるとか、強くたたいてみるとか、するようになります。子どもは、自分が何かいい音を出した時、たとえばテーブルの上のコーヒーカップをチンチンとたたいたりした時、それがいい音だったりするとすごくうれしがるんです。そういう時、あまり「いけません!!」なんて言わないで、「いい音ね、だけどこっちもいいわよ」と楽器を出すとか、子どもが何かを感じるということを引き出すようにすることが大切だと思います。

「だめ」ということを言ったら子どもは伸びないような気がするんです。だから私も、ある程度大丈夫と思ったときに初めて「あなたはこういう欠点がある」ということを言いますけれどね。それまではほめたたえるんじゃないですけれど「ここはいいわね」というふうにしか言わないことにしています。

木琴など、何でもその辺においておけば、だんだんに音に興味をもたせることもできるんじゃないかと思います。たまたまおかあさんもいっしょにそこにいて「ちょっとたたいてみようか」「おもしろい、おもしろい」とか言っている、そうすると子どももいっしょになって喜ぶ、といった情景を何回か見た

ことがあります。

私の妹の子どもが、私といっしょに声を出していたとき、ちょっと私がハーモニーをつけて三度上を歌ってやりましたら、それこそころげ回るようにして喜ぶんです。言葉では言い表わせなかったんでしょうか。そして「もう一度」、「もう一度」と言ってそのたびに喜ぶんです。母親がせめてこれぐらいのことをやってくだされば、声を出すという喜びもひとりでに育っていくでしょうし、共に何かをしているという喜びも感じることができると思います。まず、音自体に興味をもたせるようにしていけばずい分違ってくるのではないでしょうか。その意味でおかあさん、先生というものは本当に大切だと思います。

◆音楽であれば何でも、いいものはいい

音楽は感じるものです。ただ音だけだったらコンピューターにまかせたって音は出るようになっています。何か心から心へ伝わるもの、へたでも一生懸命歌っているとか、一生懸命わかってもらおうとしているとかが大切です。マヘリア・ジャクソンなども、声楽的見地からすればそれほど価値はないと思うんです。でも、何か心をうつものがあります。よっぽど変な流行歌手が小器用にやっているのよりいいですね。それが私たちだけがいいと思うだけでなく、近所の坊やが「あの変なおばさん、カバみたいなの、よかったね！」って言うんです。

いいものは子どもの心をつなぎとめるというのは本当です。いつか、バッハのマタイ受難曲（私らが聞いてもおしりが痛くなるし、外人でも聞きに行く時は座ぶとんを持って行くぐらい大変なんです）を文化会館でやりまして、歌い手、指揮者がよかったんですが、最初からしめつけられるようにいいなあと思いながら聞いていたんです。ひょいと横を見たら小学校二年生ぐらいの坊やが一人できているんです。おかあさんがこられないので、高い切符だしもったいないので来たんだと言うんです。特に音楽をやっているわけじゃなく、学校では笛をやっているらしいんですけど。こんなの、続くかしらと思って見ていましたら、のり出すようにして聞いているんです。とにかく最後まで聞いてました。「どうだった？　たいくつしなかった？」ときくと、「たいくつしなかった、よかった」と言うんです。二分とじっとしていないような男の子をこれだけひきつけるものは何か。何か音楽独特の力みたいなものがあるんじゃないかと感じました。

音楽であれば何でも、いいものはいいと私は思います。民謡なんか私も大好きですし、シャンソンもすばらしい。スタイルがよくて顔もきれいなら、もうカンツォーネ歌手ぐらい、ぜっ

たいになっていたと思うんです。とにかく、クラシックでなきゃダメだとか、そういう考え方はよくないと思います。子どもが変な歌をうたうから困るとかおかあさんはおっしゃいますが、何も歌わないよりいいと思うんです。とにかく観念でものを考えてもらいたくないと思います。

◆母親へ

あすはどうなるかわからないこの時代に、これだけは絶対自分のものだというものを、何か一つ子どもにもたせてやること、これは親の最低のつとめだと思うんです。みなさんお金を残すことは考えていらっしゃるけど、教育を身につけさせる、変に教育ママじゃなくて、自分もいっしょに勉強しながら自然に子どもの身につけさせてほしいと思います。今のおかあさんは勉強しなさすぎますね。母親が何かをやっているということは、子どもの誇りとなり自信となるものです。

私の知人でろうけつ染の大家がいますが、そこの家の男の子三人は、そろって「うちのママの作品」を胸をはって自慢します。家の中はもちろんひどい様子ですが、うちの中の仕事はご主人も子どもたちもみんなで分担しているんです。「料理はうちのママ、ダメなんだ」とハッキリ子どもたちも言いますが、何も軽蔑していないんです。子どもの尊敬をつなぐということを今のおかあさんはできないのじゃないかと思います。絶対のものをもっている、勉強しているという姿勢だけでも母親がもっていれば、子どもは違ってくるものだと思います。

――ある日の午後、お茶の水大学の学生が三人で小野先生（国立音楽大学助教授声楽専攻）のお宅へうかがって、先生が日ごろから胸にためていらしたことをうかがってきました。――

記録　神・川井・高橋